『ニヤーヤ・スートラ・タートパルヤ・ディーピカー』について

室　屋　安　孝

1． 表題の『ニヤーヤ・スートラ・タートパルヤ・ディーピカー』(Nyāya-sūtratātparyadīpikā，以下 NTD) はバッタ・ヴァーギーシュヴァラ (Bhaṭṭa Vāgīśvara) による『ニヤーヤ・スートラ』(Nyāyasūtra，以下 NS) への直接の注釈書で，1979 年にキショール・ナート・ジャー (Kishor Nath Jha) によって初めて出版された．NTD にタクル (Anantalal Thakur) は序文を寄せ，著者ヴァーギーシュヴァラと彼の作品の特徴を分析しており，現代まで定説として利用されているいくつかの重要な見解を表明している．たとえば著作年代について，ヴァーギーシュヴァラが『ニヤーヤ・ヴァールティカ・タートパルヤ・ティーカー』(Nyāyavārttikatātparyaṭīkā，以下 NVTṬ) を著したヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Miśra) を知っており，ウダヤナ (Udayana) の注釈を知らず，文体も新ニヤーヤ学派のものでなく古典期のものなので，ヴァーチャスパティとウダヤナの間に位置すると説明した[1]．しかしながらこのタクルによる相対年代の仮説 (以下「タクル仮説」) は NTD の NS 注釈や NS 本文の伝承形態からみて問題があり，様々な観点から再度精査される必要がある．本稿はタクル仮説の検証を主たる目的とし，あわせて NTD の写本状況，刊本の性格，古典ニヤーヤ研究に与える意義を考察することを意図している．NTD についての個別研究はごくわずかの例外を除いてこれまでなされていない[2]．

2． 筆者は NTD 写本について既に簡単に報告しているが (Muroya 2006: 24n. 5)，新写本の報告を兼ね最新の写本状況とジャー校訂本との関係を確認したい．現在までに知られている写本は 3 本である．(a) ケーララ大学東洋学研究所・写本図書館 (ORIML) 所蔵本 (Ms. 14670, 貝葉本，92 葉，マラヤラム文字，書写年代は不明)，(b) 政府東洋写本図書館 (GOML) 所蔵本 (Ms. R. 3405，紙本，全 198 頁，デーヴァナーガリー文字，書写年代は 1920–1921 年)，(c) 政府サンスクリットカレッジ (Government Sanskrit College, Tripunithura) 所蔵本 (Transcript Ms. 315，紙本，マラヤラム文字，葉数あるいは頁数(?) 296［但し筆者未確認］)．

2．1． NTD 写本 3 本の相互関係は（a）の ORIML 本が親本で，（b）と（c）はそれからの転写本である．ORIML 本は元来コーチン王国の宰相の家系であったというパリヤム（Paliyam, Paliam）家所蔵の伝本である（Muroya 2006: 27n. 9）．刊本で用いられたのは（b）のチェンナイ本である[3]．刊本は同本を忠実に再現したものとは言いがたく，編者による本文修正が多々おこなわれている．

3． NS の本文伝承との関わりで刊本には一点問題がある．それは，ヴァーギーシュヴァラが正規の定句だとみなしているにもかかわらず，編者がそれを明確に定句として提示していないことである．編者は定句の番号も与えていないので，読者がその事実を見過ごす可能性がある．拙稿（Muroya 2006: 37–40）で指摘したように，例えば推理（anumāna）を定義する NS 1.1.5 にはディグナーガから批判を受けている別の文言 traikālyagrahaṇāt が定句として付属しているにもかかわらず，編者は注釈の一部であるかのように扱っている．同一の文は NTD 35,7 でも定句として言及されているので，ヴァーギーシュヴァラが定句とみなしていたことは間違いない．筆者が現在研究している NS 第五篇には同様の例が少なくとも 2 例見られる．ヴァーギーシュヴァラは NS（ed. NTD）5.1.41 = NS 5.1.43 の後に三つの定句を配置している[4]．あるいは W. ルーベンや NS 注釈の刊本で複数の定句とみなされている文言をヴァーギーシュヴァラが一つの定句だと表明している場合，編者は通行の番号付けにしたがっている．例えば〈再説〉（punarukta）という議論・論争における〈敗北の場合〉（nigrahasthāna）を定義する NS 5.2.14–15 の注釈でヴァーギーシュヴァラは iti sūtrārthaḥ と結んでいるので，両者を一つの定句だとみなしていることが分かる．一方，NVTṬ の著者ヴァーチャスパティはここで定句は二つであると明示しているので（NVTṬ 691,1: tad anena sūtradvayena punaruktam ekam eva nigrahasthānam . . .），両者の対立は明らかである．

4． NTD 刊本に序文を寄せたタクルが既に指摘しているように，NTD には『ニヤーヤ・バーシャ』（Nyāyabhāṣya，以下 NBh）や『ニヤーヤ・ヴァールティカ』（Nyāyavārttika，以下 NV），NVTṬ とほぼ同一の文がしばしば見られる（Preisendanz 2005: 62）．NBh や NV との並行箇所は NTD の本文では引用として明示されることはなく，定句への注釈の一部あるいは全体として本文に埋め込まれているので，ヴァーギーシュヴァラが再利用したと考えられる．先行文献のこのような再利用は例えば NV にも見られ，NBh は引用という形式をとらず NV 本文に組み込まれることがある．

4．1． ここで問題となるのは NVTṬ との並行箇所である．前述のようにタクル

仮説に従えばヴァーギーシュヴァラはNVTṬから関連箇所を援用したことになるが，次に紹介する資料は引用関係の方向性を考える上で興味深い．

NTD 156,20–26 on NS *5.2.15（ed. 5.2.16）: (1)prativādinā na tāvat sarvaṃ dūṣaṇīyam, anyatamāvayavadūṣaṇenaiva sādhanasya dūṣitatvena doṣāntarābhidhānavaiyarthyāt. na khalu mṛto mṛtyunā punaḥ (1)śakyo mārayitum, evaṃ dūṣitam api na śakyaṃ dūṣayitum. (2)tasmād anyatamasya (2)dūṣaṇasya pariṣadā vijñātasya vādinā trir abhihitasya tacchabdena śabdāntareṇa vā yad apratyuccāraṇaṃ *tad ananubhāṣaṇaṃ nigrahasthānam, anyathā (A)*dūṣaṇasyāśrayasyānir-*deśe na tasyāvayavasyedaṃ dūṣaṇam iti saṃśayaprasaṅgāt. na ca (3)(B)sarvānuvādo 'bhimataḥ, (3)(B)tathā saty adūṣyānuvādadviranuvādādidoṣaprasaṅgād iti sūtrārthaḥ.（*v.l.*: *tad] Mss. ORIML, GOML; na tad *ed.* —*dūṣaṇasyāśraya-] Mss. ORIML, GOML; dūṣaṇāśraya *ed.* —*-deśe na] *em.*, Ms. ORIML; deśena *ed.*, Ms. GOML.）.

NVTṬ 692,9–19 on NS 5.2.16: syād etat—(1)*prativādinā na tāvat sarvaṃ dūṣaṇīyam, anyatamāvayavadūṣaṇenaiva sādhanasya dūṣitatvena doṣāntarābhidhānasya vaiyarthyāt. na khalu mṛto mṛtyunā rakṣitaḥ *śakyo mārayitum, evaṃ dūṣitam api *na śakyaṃ dūṣayitum. (2)tasmāt saty api *dūṣaṇabāhulye (2)'nyatamaṃ (2)dūṣaṇīyam. tathā ca (B')sarvānubhāṣaṇe sarvasyādūṣyatvād yad dūṣaṇīyaṃ tat punar anūdyam iti (3)(B)sarvānuvāde dviranuvādo 'dūṣyānuvādaś ceti *nigrahasthānadvayam. (C)tasmād anubhāṣaṇam eva nigrahasthānam iti viparītam āpatitam ity ata āha—apratijñānāc ceti.（*v.l.*: *prativādinā na] J1; na prativādinā *ed.*—*śakyo mārayitum] J1; mārayituṃ śakyaḥ *ed.*—*na śakyam] J1; *om. ed.*—*dūṣaṇa-] J1; dūṣya *ed.*—*nigrahasthāna-] J1; dūṣakanigrahasthāna *ed.*）.

4．2． 上記二つのテクストは〈敗北の場合〉の一つ〈立論者の主張を繰り返せないこと〉（ananubhāṣaṇa）に対する注釈部分に相当する[5]．数字で下線を付した部分はNTDとNVTṬの並行箇所で，アルファベットをともなう下線部分は他の関連資料を示す．NVTṬの本文批判について補足すれば，上記テクストはタクルによる刊本によらず，13世紀初頭に筆写されたジャイサルメール写本（略号J1，Jaisalmer Jain Bhaṇḍāra, Ms. ji. kā. 1274，書写年代は西暦1222年）に基づいている．タクルによって使用された15世紀のジャイサルメール写本（Ms. ji. kā. 69，書写年代は西暦1444年）はJ1の忠実な転写本なので同一の本文であるが，タクル本は上に注記した重要な異文を報告していない．

4．3． 両テクストを比較してすぐに，NTDのテクストの多くがNVTṬになるとsyād etatに導かれる「想定反論」の中に置かれていることに気づくだろう．タクル仮説に立って状況を説明すれば，ヴァーギーシュヴァラはNVやNVTṬにとって批判の対象となるような学説をNSを支持する自説に改変し，資料としてはNVTṬから借用したということになる．しかしこのような複雑なプロセスを実際におこなったとは考えにくい．むしろヴァーギーシュヴァラの解説こそがNVTṬ

の反論部分の下敷きになったと判断する方が自然であろう．

4．4． 対応箇所の内容をみる．下線部（1）は，議論・論争における対論者の応答（uttara）では論証式の支分のうち一つにだけ論駁が加えられれば充分であり，さらに他の支分あるいは論証の構成要素を論駁する必要のないことを，（2）はこの説明をまとめている．（3）では相手の論証のすべてを繰り返して述べる場合の二つの過失が示される．

4．5． では，対応箇所の文脈や構成はどうなっているのか．NTD では定句を解説する下線部（1）と（2）が前半にあり，下線部（3）を含め後半は対論者からの批判を想定した補強部分となり，構成上も分かりやすい．下線部（A）は NV の「応答はその基体がなければ妥当ではない」（NV 527,11: uttaraṃ cāśrayābhāve na yuktam）に対応する．逆に NVTṬ の文脈は複注としての性格上複雑になっている．そこではヴァーチャスパティが NV を注釈しており，一方の NV ではウディヨータカラが，ニヤーヤの定義は〈敗北の場合〉に当たらないと非難する「ある特定の誰か」（kecit）からの批判に反論している部分にあたる[6]．ウディヨータカラは二つの理由を挙げて反論する．それは「〔立論者の主張を繰り返さなければ反論者による〕応答の対象が理解されないから」（uttaraviṣayāparijñānāt）という理由の第一と[7]，「〔最初に立論者の論証を繰り返しそれから論駁すべきとは〕主張していないから」（apratijñānāt）[8] というものである．上記の NVTṬ からの引用箇所は第二番目の理由を説明するにあたってヴァーチャスパティが導入する想定反論の形をとっている．

4．6． テクストの歴史的背景はどのように分析できるのか．ウディヨータカラの対論者（“kecit”）はヴァーチャスパティによれば「仏教徒」（bhadanta）であるが，ムフ（Michael Torsten Much）はディグナーガの断片であろうと推定している[9]．ウディヨータカラの応酬に対しては，ダルマキールティ（Dharmakīrti）が『ヴァーダ・ニヤーヤ』（Vādanyāya）で再反論を加えている．ムフの推定にもとづけば，ディグナーガを擁護していることになる．ダルマキールティは，ニヤーヤ学派の定義する ananubhāṣaṇa は〈敗北の場合〉にあたらないし，それは〈応答を思いつかないこと〉（apratibhā）という〈敗北の場合〉と同じであるというのが反論の趣旨である．

4．6．1． 興味深いことに，上記テクストの下線部（3）と（B）は特にダルマキールティによるウディヨータカラ批判と内容上重複している．下線部（B’）sarvānubhāṣaṇe は，ダルマキールティでは「立論者のすべての主張を一度に繰り返す場

合には」(VN I 54,9: sakṛtsarvānubhāṣaṇe) と言われている部分に対応すると理解され，下線部（B）の「立論者の論証のすべてを繰り返す場合」(sarvānuvāde) というNTD と NVTṬ の両方にみられる想定に意味上連関している．また下線部（3）で示される二種類の「付随して起こる望ましくない帰結」(prasaṅga) はダルマキールティに対応箇所があるが，本来はダルマキールティによって以下のように言われていた：

> 論駁を述べる側によって論駁が述べられる場合，それに役立たないことを述べることは「過失を指摘しないこと」と「繰り返しの陳述」ということになるので，〔立論者の論証を〕一度にすべて繰り返すことは敗北の根拠であるといわなければならない[10]．(VN I 54, 13–15: dūṣaṇavādinā dūṣaṇe vaktavye yan na tatropayujyate tasyābhidhānam adoṣodbhāvanaṃ dviruktiś ceti sakṛt sarvānubhāṣaṇaṃ parājayādhikaraṇaṃ vācyam.)

4．6．2． 下線部（B'）と（B），（C）に見られるように，ヴァーチャスパティは VN を強く意識した想定反論を作成しているといえる．また上記第 4.3 節で述べたように，ヴァーチャスパティが NTD を参照したという両者の相対関係から総合的に見れば，syād etat という想定反論でヴァーチャスパティはダルマキールティとヴァーギーシュヴァラの学説を批判しているということになるだろう．

5． 第 4.1–4.6.2 節で取り上げた資料はタクル仮説に疑問を呈し，逆の可能性，すなわちヴァーチャスパティがヴァーギーシュヴァラの注釈を利用したのではないかという想定に一定の蓋然性をあたえるのに充分であると筆者は考える．それが直接であったのか間接的な利用であったのかは，ヴァーチャスパティが薫陶を受けた師トリローチャナ（Trilocana）の注釈が現存していないこともあり俄かには判定できない[11]．また今回の NVTṬ のケースでは NTD だけを引用せずダルマキールティの NV 批判が合揉されているので，たとえば共通の典拠に基づいている可能性も排除できない．

5．1． 上述の事例以外にもタクル仮説では両者の相対年代を説明しにくい事態がいくつかある．筆者のこれまでの研究から，NTD の学説や NS の伝承は NVTṬ に比べ総じてアルカイックな特徴をもっていると指摘することができる．たとえば（1）NTD の NS の伝承は，ヴァーチャスパティに先行すると考えられるバッタ・ジャヤンタやバーサルヴァジュニャに一致すること（Muroya 2006: 29–30, 35），（2）NTD に引用される NBh の本文が明らかに古形を示していると考えられること[12]，などがある．これらの事実は相対年代を決定する強力な証拠ではないが，全体として筆者の仮説を支持する「指標」となると考える．してみれば，NTD

にみられる NS の伝承を考察することはヴァーチャスパティ以前の NS 伝承を解明する糸口になるだろう．また本小論で提出した仮説は今後の検証が必要であることは言うまでもない．検証作業は同時にヴァーチャスパティに先行する NS の注釈の伝統の姿を再構成する可能性を模索するという課題であり，NVTṬ の歴史的再評価という視点を要求することになる．

本小論で使用した写本（情報）の使用・複写を許可してくださった故 Muni Shree Jambuvijayajī 及び Muni Shree Puṇḍarīkaratnavijayajī, Government Oriental Manuscripts Library（Chennai，以下 GOML），Oriental Research Institute & Manuscripts Library（Thiruvananthapuram，以下 ORIML），Government Sanskrit College（Tripunithura, Ernakulam），FWF Project No. 24388（Metaphysics and Epistemology of the Nyāya Tradition III）に謝意を表す．またご批判とご教示を賜った安達俊英先生，渡辺俊和先生に記して厚く御礼申し上げる．

1）NTD, prastāvanā, p. ṭa：tātparyaṭīkāntasya nyāyamūlagranthatritayasya vyavahāro 'tra bhūyasā dṛśyate. nātra nyāyanibandhasya na vā tatkartur ācāryasyodayanasya parāmarśo 'py atrāyāti. etavatā[!] udayanād api prāgbhavatvam asya granthakārasyety ābhāti. Karl Potter（ed.），*Encyclopedia of Indian Philosophies*, vol. I, Bibliography, Section I, Delhi：Motilal Banarsidass Publ., 1995 は年代不明の文献（“DU806”）に分類しているが，理由を明記していない．また同書の“DU806.1.1”に挙げられるタクル版（“Allahabad 1976”）の存在は確認されていない．

2）NTD を紹介する論文としては Preisendanz 2005，NTD の NS の伝承と注釈をあつかった研究としては同氏 *Studien zu Nyāyasūtra III.1 mit dem Nyāyatattvāloka Vācaspati Miśras II*（Stuttgart：Franz Steiner Vlg., 1994），NTD の NS の伝承を扱った論考は Daya Krishna, *Indian Philosophy—A Counter Perspective*（Delhi：Oxford University Press, 1997），pp. 110–143 などを参照．

3）NTD の編者ジャーによる序文（prāstāvikaṃ kiñcit, pp. ka–kha）を参照．

4）一つは NTD 151,18–19：caturthaṣaṣṭhayor arthāviśeṣāt punaruktadoṣaprasaṅgaḥ(,) samānaḥ tṛtīyapañcamayoḥ で，もう一つは NTD 151,23：ṣaṭpakṣyām ubhayor asiddhiḥ である．前者を二つの定句とする立場はウダヤナによって「ある者たちの迷妄」（keṣāñcid bhramaḥ）として批判されている．Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi（ed. Thakur）581,9–10 を参照．

5）小野卓也「Nyāyapariśiṣṭa について（3）——討論の格率——」『曹洞宗研究員研究紀要』第 36 号，2006 年，（101）–（121）頁などを参照．

6）NV（ed. Thakur）527,4：na, uttareṇāvasthānān nedaṃ nigrahasthānam iti kecit. またダルマキールティによる引用箇所（VN I 52,11：uttareṇāvasānān nedaṃ nigrahasthānam iti cet）も参照．

7）NV 527,7–8 = VN I 52,15. NV 527,8 及びそれを引用する VN I 52,15–16 も参照．

8）NV 527,10 = VN I 53,1. NV 527,10 及びそれを引用する VN I 53,1–3 も参照．

9）Michael T. Much, “Fragments from Dignāga? Traces of a Pre-Dharmakīrti Buddhist Polemic

against the Nyāya-nigrahasthāna,” in Ernst Steinkellner (ed.), *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition* (Wien: Vlg. der Österreich. Akad. der Wiss., 1991), pp. 211–220, esp. pp. 211 and 217 (Fragment #17).

10) 翻訳は VN II 95, Pradeep P. Gokhale, *Vādanyāya of Dharmakīrti* (Delhi: Sri Satguru Publ., 1993), p. 125 を参照．adoṣodbhāvana を NVTṬ と NTD で対応する箇所 adūṣyānuvāda に基づいて「過失に当たらないことを指摘すること」と理解して，VN I 23,7–10 で説明される別の解釈と関連づけることも可能かもしれない．VN における当該語の研究は佐々木亮氏の「ダルマキールティの nigrahasthāna 解釈（2）—— adoṣodbhāvana について——」『久遠——研究論文集——』第 4 号，2013 年，55–75 頁を参照．関連資料についてご教示を下さった佐々木氏に記して感謝する．

11) ヴァーチャスパティの注釈とトリローチャナとの関係についてウダヤナは「師トリローチャナからえられた教説の真髄は NV などの古い注釈を復活させるために活用される」(NVTP 3,8–10: kiṃ nāmātra trilocanaguroḥ sakāśād upadeśarasāyanam āsāditam amūṣāṃ punarnavībhāvāya dīyata iti yujyate) という解釈に言及している．解説は Preisendanz (2005: 65) を参照．トリローチャナの作品については Preisendanz (2005: 65n. 29) を参照．

12) 例えば NBh 313,16 の ślisṭa-（本筆者が用意している校訂本では klisṭa- を採用）が，NVTṬ 685,1（ślisṭa-; J1 も同様）や NTD 155,14（klisṭa-），VN I 42,17（刊本は ślisṭa- だが，チベット訳 dri ma can 及び注釈は NTD の本文を支持する）に言及される場合．

〈略号と主な参考文献〉

NTD = *Bhaṭṭavāgīśvarapraṇītā Nyāyatātparyadīpikā*, ed. K. N. Jha, Allahabad: G. N. Jha Kendriya Skt. Vidyapeetha, 1979; NVTṬ = *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā of Vācaspatimiśra*, ed. A. Thakur, New Delhi: Ind. Council of Philosophical Research, 1996; VN = *Dharmakīrti's Vādanyāyaḥ, Teil I: Sanskrit-Text, Teil II: Übersetzung und Anmerkungen*, ed. Michael Torsten Much, Wien: Vlg. der Österreich. Akad. der Wiss., 1991.

Muroya 2006 = Yasutaka Muroya, “Some Observations on the Manuscript Transmission of the Nyāyabhāṣya,” *Journal of Indological Studies* 18 (2006), pp. 23–62; Preisendanz 2005 = Karin Preisendanz, “The Production of Philosophical Literature in South Asia during the Pre-Colonial Period (15th to 18th Centuries): The Case of the *Nyāyasūtra* Commentarial Tradition,” *Journal of Indian Philosophy* 33 (2005), pp. 55–94.

（ドイツ研究振興協会 DFG の Project No. FR 2531/4-1 による研究成果の一部）

〈キーワード〉 Bhaṭṭa Vāgīśvara, Nyāyasūtratātparyadīpikā, Vācaspati Miśra, Nyāyavārttika-tātparyaṭīkā, 相対年代

（ライプツィヒ大学研究員，博士（文学））